

序文

鈴木則子 3

I 宗教／儀礼／穢れ

善光寺と女人罪業観

平 雅行 13

はじめに／一 善光寺と女性／二 善光寺縁起と女人／三 貴女の墮地獄譚と善光寺
／おわりに―女人罪業観の社会的浸透

富士講・不二道の女性不浄観批判―妊娠と出産についての言説を中心に

宮崎ふみ子 37

はじめに／一 食行身祿と参行六王の教え―世の変革と女性罪業観・女性不浄観の否定
を中心／二 不二道による男尊女卑の批判と妊娠・出産に関する説／三 不二道の
妊娠・出産に関する言説の特色―女訓書・産科養生論との比較を通して／おわりに

奈良の伝統的祭礼と女性——歴史民俗学的視座からの分析

武藤康弘 65

はじめに／一 除災行事における女性／二 農耕儀礼における女性の関わり／三 歴史民俗学的にみた神道祭祀と女性の関わり／おわりに

古代浴衣復元のための覚え書き

武田佐知子 91

はじめに／一 温泉と浴衣／二 古代の浴衣／三 湯帳の形態／四 天羽衣―天皇の羽衣

女性と穢れ——『玉葉』を手がかりとして

加藤美恵子 115

はじめに／一 神事と月穢／二 産穢と傷胎／三 出産空間の白設と白不浄／おわりに

宗教都市におけるケガレの操作と「清浄」概念の共有

濱千代早由美 139

はじめに―伊勢神宮鳥居前町の形成とケガレ／一 鳥居前町の生活の中のケガレと禁忌
／二 ケガレへの対処／三 ケガレ対処の実際―「一藤得輝神主御逝去二月萬控」に見る
死穢・月水のケガレ／おわりに―ケガレの操作と「清浄」概念の共有

近世における北野社門前の社会構造——芸能・茶屋興行を中心に

三枝暁子 161

はじめに／一 芸能興行と目代／二 茶屋と遊郭をめぐる支配／おわりに

Ⅱ 医学／衛生

中国医学における感染症認識

白杉悦雄
201

はじめに／一 漢唐医書にみえる感染症認識／二 気象理論と中国医学／三 運氣論
／四 都市と感染症／五 温病論／六 日本における感染症認識／おわりに

江戸時代の結核——「恋の病」考

鈴木則子
218

はじめに——〈結核のロマン化〉をめぐる／一 曲直瀬道三の時代——一六世紀後半／
二 古活字版・和刻本の医書——一七世紀前半／一八世紀前半／三一七世紀後半からの
日本医書／四 文芸史料の中の結核／おわりに

衛生思想の中の女性——その周縁性と共生性

瀧澤利行
244

はじめに／一 衛生思想の思想的位相／二 近世期の養生論における「女」の認識／
三 近代日本の衛生観の転換／四 明治期養生論・衛生論における女性認識／五 女
性衛生関連団体の設立と女子衛生思想の普及／おわりに——仮定衛生論・女子衛生論の
主たる言説体系を通じた女性にとっての衛生と養生

眼の感染症にみられる女性観——眼の通俗衛生と女性

尾鍋智子
274

はじめに／一 失明の原因に占める感染症／二 眼の感染症と女性観／おわりに

規範としての「自然」——江戸時代の育児書を手がかりに

梶谷真司
289

はじめに／一 育児書から見た「自然」の意味／二「自然」の身体的・情動的次元
／三 心身連続の人間観と「自然」／おわりに

不妊の原因としての淋病——明治・大正期の庶民の生殖観の変化と買春の問題化

林 葉子
307

はじめに——生殖力を脅かすものとしての淋病／一 新聞広告にみる不妊の表象／二 民間医学書における不妊についての記述／おわりに——男性不妊と買春の問題化

『青鞥』への道——保持研と南湖院

池川玲子
331

はじめに／一 今治時代／二 日本女子大学校時代／三 高田畊安／四 南湖院から
『青鞥』へ／おわりに——保持研の『青鞥』への道

後 記

執筆者紹介

序 文

鈴木則子

日本の歴史の中で、女性の周縁化の進行を示す象徴的事象の一つは、女人禁制というルールの出現である。その背景に、女性の身体に対する穢れ意識が深く介在していたことは、従来から指摘されてきた。

穢れについては中世史研究領域で、かつて黒田俊雄・大山喬平により、触穢思想が平安初期に大陸から先進思想として輸入され、それが部落差別に結びついたことが指摘されている。⁽¹⁾だが、なぜ触穢思想が受容されたのか、そしてなぜそれが女性身体への穢れ意識に結びつき、ついには女人禁制へと帰結したのか、という点は検討されてこなかった。

これらの問題について、脇田晴子が「女人禁制と触穢思想——ジェンダーと身体的性差」、『日本中世被差別民の歴史』、『中世京都と祇園祭——疫病と都市の生活』⁽²⁾という一連の研究のなかで、新たな視点を示した。脇田は、中国・韓国から渡来した触穢思想は、日本の一定度の社会的発展により受容基盤が熟した平安初期、未熟な段階の衛生思想として都の貴族層に受け入れられたと推論する。当時疫病は怨霊（御霊）化した疫病神の崇りと考えられていたが、同時に死体や血液が疫病を媒介することを経験的に気づいており、「血穢」「死穢」を忌避した。そして人間が避けることのできない生老病死の現象を「穢れ」とし、出産や月経で体内から出血する女性に責任を負わせ、死体を「死穢」に染むものとして弱者である被差別民におしつけたとみる。触穢思想は南北朝期に一定の普及をみせ、戦国期には解放の動きと農村への普及の動きとが交錯する。脇田は触穢思想とそこから生まれ

た女人禁制が一般民衆世界にまで広範に定着するのは、江戸中期と推論している。

触穢思想の背景にある感染症への恐怖、それが女人禁制に象徴される女性の周縁化に結びついていくという流れへの展望は説得力を持つが、触穢思想および衛生思想が時代によって、また受容層によってみせる異なった展開や、それらの展開を受けて多様な女性排除の形が出現していくさまを、個別の事例から検証していくという課題が残された。

いっぽう近年は、穢れ意識や衛生認識の変化を、経済や行政システムの転換、メディアの展開といった多様なファクターから見直し、それらが被差別民や女性に対するまなざしに与えた影響について、新しい実証研究が蓄積されてきている。

たとえば前近代では宮崎ふみ子が、江戸中期の恐山で女性が落ちる「血の池地獄」が成立した背景を、恐山の観光化や寺院経営問題との関わりの中で解き明かした。⁽³⁾ また近代史では小林丈広が、コレラ防疫行政の展開が地域差別を変容させていくさまを論じており、成田龍一は、近代社会で女性が衛生の担い手とされたことや、女性に対する衛生の普及が、衛生に裏付けられた新しい女性美の基準を定着させたことを指摘する。⁽⁵⁾ さらに福田真人の、「美女と天才の病」という近代の結核イメージに関する研究などもあげることができる。⁽⁶⁾

右の研究成果は、穢れと衛生という領域から女性が周縁化される道筋を明らかにする、という研究方法の有効性を示すと同時に、その使われている史料の多様性によって、これらの領域のなかで、さらに多くの実証研究を今後も蓄積しうる可能性と必要性とを示唆した。

そこで穢れと衛生をキーワードに据え、女性の身心に対するまなざしの歴史的変容を多角的に検討することをめざして、歴史学を中心に、医学や文化人類学、民俗学、比較文化学、衛生学、哲学などの研究者が広く連携する形で共同研究を組織した。本書はその共同研究の成果である。

以下、収録論文について、本書の構成に基づき二部に分けて紹介する。なお、各部の中の紹介順序は論文の掲載順と必ずしも一致しない。

I 宗教／儀礼／穢れ

ここでは宗教や儀礼の世界にみられる、女性の罪や穢れに対する認識と対応についての研究、またそれと関わって、宗教都市（地域）の歴史の変容に関する研究を収めた。

まず、宗教をめぐる。

中世史の平雅行はかつて、旧仏教によって仏教的な女性差別観である女人罪業観が貴族層へ浸透するのが、九世紀後半からであることを明らかにしているが、本書に収めた「善光寺と女人罪業観」では、善光寺信仰の分析に基づいて、女人罪業観が庶民層にまで定着していった時期が一五世紀後半以降であることを指摘する。定着の背景には、一五世紀から一七世紀にかけて百姓世界に家父長制家族が成立し、女性の従属化が進展したことがあげられている。ただし、その段階でも善光寺信仰は女性に対する差別的救済論一色ではなく、女人罪業観の影響がほとんどない善光寺縁起も存在しており、女人罪業観が民衆世界へいかに定着するかは、さらに検証が必要であるとする。

近世史からは宮崎ふみ子「富士講・不二道の女性不浄観批判——妊娠と出産についての言説を中心に」が、宗教が女性の周縁化を積極的に否定した状況を明らかにした。幕末の富士講・不二道は、月経・妊娠・出産を清浄であると説き、社会一般に定着していた女性不浄観を批判した。それは世の変革に伴って陰陽や男女のあり方が逆転する、という教義に基づく考え方でもあり、江戸時代後期に広がった賀川流産科という新しい実証的産科医学知識の反映でもあった。だが、妊娠・出産の禁忌からの解放だけでなく、女性不浄観・罪業観のような社会通

念も含めたレベルでの女性の解放には、宗教的信念が大きな役割を果たしたことを指摘する。

武藤康弘「奈良の伝統的祭礼と女性——歴史民俗学的視座からの分析」は、奈良県内の祭礼調査を通じて、女人禁制には多様な排除のレベルと形があり、また時代によっても変化をみせることを明らかにする。ことに近年の少子高齢化は、文字通りの聖域にも現代の変容をせまっていて、祭礼の担い手の減少は従来宮座から排除されていた成人女性の参加を、圧倒的少子化は男児の祭りへの女兒の参加を促進させている。伝統的共同体祭祀が実は柔軟さを併せ持つことをうかがわせる。

右の三論文が庶民世界と宗教との関わりを論じているのに対し、次の武田論文・加藤論文は、朝廷・貴族社会における浄めと穢れを分析対象とする。

武田佐知子「古代浴衣復元のための覚え書き」は、写経所の経師らが写経という清浄な仕事に従事するにあたって入浴する時に着用した「温帳」や、天皇が大嘗会の際、浄めのための入浴に用いたユカタビラ「天羽衣」の形態を論ずる。浄衣という服飾の復元を通して、古代朝廷が浄めにいかに対応していたのかがみえてくる。浄め・穢れについて、服飾史からアプローチするという新しい方法を提示したといえよう。

加藤美恵子「女性と穢れ——『玉葉』を手がかりとして」は、『玉葉』を史料に、院政期から鎌倉初期、神事の際の月経・出産・流産に関わる触穢期間の規定が、次第に長期化・厳格化されていくプロセスを具体的に検証する。この時期の上級貴族の間でも、人によって触穢規定に対する解釈や運用にばらつきがあったことが明らかにされている点も注目される。

また、貴族社会の産所空間で母子を守る防衛のための色として用いられた白が、江戸時代に庶民の出産空間へも広がっていき、産穢を象徴する「白不浄」という認識へ転換していったことを推測している。

濱千代論文と三枝論文は、それぞれ伊勢と京都北野社門前という宗教的な「場」に焦点を当て、近世の寺社参

詣ブームの中で変容していく町の姿を描く。

まず濱千代早由美「宗教都市におけるケガレの操作と「清浄」概念の共有」は、近世に飛躍的に参詣人が増大して宗教観光都市と化した伊勢が、都市の清浄を参詣人に保証するため、穢れに柔軟に対応するシステムを構築していたことを、名所図会・神異記などの参宮メディア、葬儀に関する私的記録などの史料から検証する。

特に「ハヤガケ」と称して、すでに生じてしまった死穢をなかつたことにするための方便（遺体を区域外に運び出してから死亡したことにする）を儀礼化していた事実は、近世社会の穢れ意識の特質を考える上でも重要である。

いっぽう北野社の門前も、やはり参詣人増加を背景として、特に一八世紀に入って芸能興行が盛んとなる。三枝暁子「近世における北野社門前の社会構造——芸能・茶屋興行を中心に」は、北野社目代の記録を史料に取り上げ、北野社による門前の芸能・茶屋興行の支配システムの実態や、興行に関与した周縁的な人々の諸相についても明らかにする。夜の水茶屋営業が、やがて遊郭の成立へつながった可能性も指摘している。

これらの変化は、伊勢の場合はより多くの参詣人誘致のため、北野社の場合は主たる財政基盤が賽銭収入と門前の芸能・茶屋興行収益に移行したため、と経済的な問題を背景にしている点でも共通している。

Ⅱ 医学／衛生

Ⅱでは、医学や衛生が人の心身や病氣、またそれらの男女差をどのように認識していたかを分析した。

白杉悦雄「中国医学における感染症認識」は、日本を含めた東アジア文化圏医学の基礎にある中国伝統医学の、病原性微生物や抗生物質が発見される以前、過去二千年余に及ぶ、急性感染症認識の変遷を扱う。特に「傷寒」「温病」という感染症を意味する用語の概念を分析することを通じて、気候変動だけでなく都市化や戦争といっ

た人為的環境変化が感染症の盛衰を左右したことを浮かび上がらせる。ただし、中国医学自体の感染症認識は、そもそも中国医学が病を気象理論の中で理解する学問体系であるから、宇宙の気の変化によって感染症は生じるという枠組みを出ることはなかった。

梶谷真司「規範としての「自然」——江戸時代の育児書を手がかりに」は、女性に向けて書かれた江戸時代の育児書のなかに、男女に共通する人間観・病気観を読み取る。現代はヨーロッパ近代の心身二元論に基づいた人間観が基本であるが、それ以前の日本では、男女の別なく人間の心と体は連続的なものとみなされ、道德と健康の結びつきが意識された。ゆえに妊娠・子育て中の母親や乳母に対し、江戸時代の育児書は一貫して身体的・情動的安定を求めることとなったという。

道德と健康とが結びつけられたのは男女にかかわらず同じだったが、その道德心のありようには、性差があるといなされた。鈴木則子「江戸時代の結核——「恋の病」考」は、江戸時代の結核が感染症でありながら、女性と男性とで主たる病因が異なると考えられていたことを指摘する。男性は房事過多や、仕事・学問などに過度に入れ込むという不摂生が病因とされ、対して女性はその生まれながらに有する精神的未熟さや性欲の強さが病を悪化させるとされた。このジェンダーバイアスが濃厚にかかった医学的結核観は、科学が女性の心身に対する偏見を強固なものにする側面も持っていたことを示唆する。

また、林葉子「不妊の原因としての淋病——明治・大正期の庶民の生殖観の変化と買春の問題化」は、江戸時代以降も近代医学の展開が、健康と性道德を結びつけたことを指摘する。従来不妊は男性側の問題よりも、主として女性の側の問題とみなされていたのだが、一九〇〇年頃から人々のあいだに不妊の原因として性感染症、ことに淋病が認識されるようになると、淋病を家庭に持ち込む男性の「不品行」に対する非難が顕著となったという。それは同時に生殖過程において男性の役割が重視されていくことでもあった。

健康と性をめぐる認識の変容は、瀧澤利行「衛生思想の中の女性——その周縁性と共生性」においても分析される。瀧澤は近世の養生書の言説が、その受容層が庶民に広がっていくに伴って、「節欲」論から性欲に対して肯定的なものに変化していったことを指摘する。

しかし女性に向かつては、養生は産む性としての母性の側面についてのみ説かれた。それが大きく変化するのは近代以降で、自分自身の個人的健康に配慮する『養生』の時代から、社会への配慮が求められる『衛生』の時代へと転換していくなか、衛生の担い手として女性がクローズアップされるようになる。

この衛生の担い手としての女性役割について、明治期に一般向けに書かれた通俗眼科書を史料に分析したのが、尾鍋智子「眼の感染症にみられる女性観——眼の通俗衛生と女性」である。尾鍋は、女性は男性と子供の眼を感染症から守る「衛生の管理者」として機能することを求められたが、女性自身の眼の衛生管理については審美的に「美しい眼」を保つことが求められたにすぎなかったことを指摘する。女性の目の衛生はその意味で、常に他者のためのものとしてしか語られていなかったと結論づけている。

このように、女性は衛生の担い手と位置づけられても、女性自身の身体は衛生から阻害されるという側面を持ったが、他方で、そういった女性役割への期待に後押しされるようにして、活躍する機会を得た女性も生み出された。池川玲子「『青輅』への道——保持研と南湖院」は、『青輅』の中心的メンバー保持研のライフヒストリーを、近代の結核療養所南湖院院長である高田畊安との関わりに着目して論じている。畊安は、ケアの場における女性の職務遂行能力を高く評価し、女医や看護婦の養成と起用、そして女子教育の推進に積極的に動いた。日本女子大学に在学していた保持研は、結核を患って校医畊安の診察を受け南湖院に入院する。貧しい彼女は畊安の支援によって南湖院に生活の基盤を得、またここが『青輅』の活動と深く関わる場となっていく。

以上にみてきたように本書は、一次史料だけでなく多様な二次史料も用いることによって、穢れと衛生に関わる問題が、各時代や社会の中で女性の周縁化を進行させていく道筋を、具体的な事例から検討することができた。またそれとともに、たとえば幕末の不二道による女性不浄観の否定の動きのように、共生への道を展望させる明確な事例も抽出している。その意味で、本書は当初の課題に対して一定の成果を出し得たと自負する。

しかしながら、穢れと衛生が相互に歴史の中でどのように重なり、連続し、また入れ替わり、もしくは無関係なものとして存在したのか、という問題については共同研究の期間内に十分な議論を尽くすに至らなかった。今後の課題とすることを確認しておきたい。

(1) 黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』（岩波書店、一九九〇年）。大山喬平『日本中世農村史の研究』（岩波書店、一九七八年）。

(2) 「女人禁制と触穢思想——ジェンダーと身体的性差——」（『女性史学』一五、二〇〇五年）、『日本中世被差別民の歴史』（岩波書店、二〇〇三年）、『中世京都と祇園祭——疫病と都市の生活』（中公新書、中央公論社、一九九九年）。

(3) 宮崎ふみ子「霊場恐山 の地蔵と温泉」（日本温泉文化研究会編『温泉の文化誌』岩田書院、二〇〇七年）。

(4) 小林文広『近代日本と公衆衛生』（雄山閣、二〇〇一年）。

(5) 成田龍一「衛生環境の変化のなかの女性と女性観」（女性史総合研究会編『日本女性生活史 四 近代』東京大学出版会、一九九〇年）、「衛生意識の定着と「美のくさり」」（『日本史研究』三六六号、一九九三年）。

(6) 福田眞人『結核の文化史』（名古屋大学出版会、一九九五年）、『結核という文化』（中央公論新社、二〇〇一年）。

(7) 平雅行「旧仏教と女性」（同『日本中世の社会と仏教』塙書房、一九九二年）、「中世仏教と女性」（『日本女性生活史 二 中世』東京大学出版会、一九九〇年）。

後 記

本書は二〇〇八年度から二〇一一年度にかけておこなった科学研究費補助金による共同研究「歴史における周縁と共生——疫病・触穢思想・女人結界・除災儀礼」(基盤研究(A)課題番号二〇二四二〇一八)の成果である。

本共同研究は、四年間に計一七回の研究会をおこない討議を重ねた。研究会では共同研究構成員の研究報告だけでなく、ほぼ毎回ゲストスピーカーによる報告も組み入れた。また併行して日本各地の聖地や祭礼・伝統芸能、女性労働に関する現地調査も計一二回行った。その成果は科学研究費補助金研究成果論集『歴史における周縁と共生——疫病・触穢思想・女人結界・除災儀礼』(二〇一二年三月)にいったんまとめている。本書はその改版であるが、執筆者は一部入れ替わりがあり、改題・改稿した論文もある。したがって私たちの共同研究の全体像を知っていたくためには、右の研究成果論集も併せてご一読いただければありがたい。

また、研究会と現地調査の記録は「科研ニューズレター」として計一五回発行し、奈良女子大学生生活環境学部生活文化学科のホームページで公開しているので、こちらもご参照いただきたい。

<http://www.nara-wu.ac.jp/life/bunka/archive/index.html>

共同研究構成員は左記の通りである(所属は二〇一二年三月共同研究終了時のもの)。

研究代表者 鈴木則子(奈良女子大学)

研究分担者 宮崎ふみ子（惠泉女学園大学） 久保田優（奈良女子大学）

平 雅行（大阪大学） 武田佐知子（大阪大学）

成田龍一（日本女子大学） 三枝暁子（立命館大学）

武藤康弘（奈良女子大学） 脇田晴子（城西国際大学）

研究協力者 長志珠絵（神戸大学） 尾鍋智子（立命館大学）

加藤美恵子（日本中世史研究者） 栗山茂久（ハーバード大学）

小林丈広（奈良大学） 白杉悦雄（東北芸術工科大学）

菅谷一則（檀原考古学研究所） 谷口美樹（富山大学）

濱千代早由美（皇學館大学） 福田真人（名古屋大学）

山崎明子（奈良女子大学） 脇田 修（大阪歴史博物館）

研究補佐 安宅亮子、磯部 香、藤本 愛

お一人ずつお名前をあげるとは紙幅の関係で省略させていただくが、ゲストスピーカーとして研究会報告をして下さった方々、調査先でお世話下さった各自自治体・博物館・資料館等の関係者の方々に、深く御礼申し上げます。

平成二六年一月

鈴木則子

林 葉子(はやし・ようこ)

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。大阪大学大学院文学研究科助教。主要論著に「見る—身体へのまなざしと権力」(岡野八代編『生きる一問で育まれる生』〈政治の発見〉第1巻、風行社、2010年)、「文明化と〈男らしさ〉の再構築—1910年代の『廓清』に見る性欲論」(荻野美穂編『〈性〉の分割線 近・現代日本のジェンダーと身体』日本学叢書②、青弓社、2009年)、「女たち／男たちの廃娼運動—日本における性の近代化とジェンダー」(大阪大学大学院文学研究科・博士学位論文、2008年)など。

池 川 玲 子(いけがわ・れいこ)

川村学園女子大学大学院人文科学研究科博士後期課程修了。東京女子大学他非常勤講師。主要論著に『「帝国」の映画監督 坂根田鶴子—『開拓の花嫁』・一九四三年・満映』(吉川弘文館、2011年)、「甲子園のパンチラー女子応援団の衣服から見る高校野球の歴史」(武田佐知子編『着衣する身体と女性の周縁化』思文閣出版、2012年)、「占領軍が描いた日本女性史：CIE映画『伸びゆく婦人』の検討」(『歴史評論』第753号、2013年)など。

三 枝 暁 子(みえだ・あきこ)

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。立命館大学文学部准教授。主要論著に『比叡山と室町幕府—寺社と武家の京都支配—』（東京大学出版会、2011年）、「秀吉の京都改造と北野社」（『立命館文学』第605号、2008年）、「豊臣秀吉の京都改造と「西京」」（吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市Ⅰ イデア』東京大学出版会、2010年）など。

白 杉 悦 雄(しらすぎ・えつお)

京都大学大学院文学研究科博士課程修了。東北芸術工科大学デザイン工学部教授。主要論著に『現代語訳 黄帝内経靈樞』（監訳、東洋学術出版社、2000年）、「江戸の体内想像図 —『飲食養生鑑』と『房事養生鑑』—」（『解剖学雑誌』第8巻第1号、2006年）、「却穀食気・導引図・養生方・雑療法」（馬王堆出土文献訳注叢書、東方書店、2011年）など。

* 鈴 木 則 子(すずき・のりこ)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程学位取得修了。奈良女子大学研究院生活環境科学系教授。主要論著に『日本梅毒史の研究 医療・社会・国家』（共編、思文閣出版、2005年）、「江戸時代の女性美と身体管理」（赤阪俊一・柳谷慶子編『ジェンダー史叢書8 生活と福祉』明石書店、2010年）、「江戸の流行り病 麻疹騒動はなぜ起こったのか」（吉川弘文館、2012年）など。

瀧 澤 利 行(たきざわ・としゆき)

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。茨城大学教育学部教授。主要論著に『近代日本養生論・衛生論集成』・『近代日本健康思想の成立』（大空社、1993年）、「養生論の思想」（世織書房、2003年）など。

尾 鍋 智 子(おなべ・ともこ)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程学位取得修了。大阪大学特任准教授。主要論著に『絶対透明の探求—遠藤高環著「写法新術」の研究—』（思文閣出版、2006年）、「目で食べるお弁当」（栗山茂久・北澤一利編『近代日本の身体感覚』青弓社、2004年）、「Bento—Boxed Love, Eaten by the Eye” in *Japanese Foodways: Past and Present*. Rath, C. Eric & Assmann, Stephanie eds. University of Illinois Press. 2010. など。

梶 谷 真 司(かじたに・しんじ)

京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。東京大学大学院総合文化研究科准教授。主要論著に、『シュミツ現象学の根本問題—身体と感情からの思索』（京都大学学術出版会、2002年）、「集合心性と異他性—民俗世界の現象学」（小川侃編『雰囲気と集合心性』、京都大学学術出版会、2001年）、「江戸時代における身体観の変化とその哲学的意義—蘭医方以前と以後の育児書を手掛かりにして」（実存思想協会編『実存思想論集 XXIII アジアから問う実存』第2期15号、2008年）など。

執筆者紹介
(論文収録順、*は編者)

平 雅 行(たいら・まさゆき)

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。大阪大学大学院文学研究科教授。主要論著に『日本中世の社会と仏教』（塙書房、1992年）、『親鸞とその時代』（法蔵館、2001年）、『歴史のなかに見る親鸞』（法蔵館、2011年）など。

宮崎ふみ子(みやざき・ふみこ)

東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。恵泉女学園大学人間社会学部教授。主要論著に「18から19世紀日本における参詣の流行と霊場の発展」（『東アジア宗教文化研究』創刊号、東アジア宗教文化学会、2009年）、『動乱の中の信仰』（井上勲編『日本の時代史 20 開国と幕末の動乱』古川弘文館、2004年）、『富士山と日本人』（共著、青弓社、2002年）など。

武 藤 康 弘(むとう・やすひろ)

國學院大學大学院文学研究科博士前期課程修了。博士（文学、東京大学）。奈良女子大学研究院人文科学系教授。主要論著に『映像でみる奈良まつり歳時記』（ナカニシヤ出版、2011年）、「映像人類学の実践的試み—奈良の伝統的祭礼の映像アーカイブの構築—」『奈良女子大学文学部研究教育年報 大学・研究所紀要』第6号、2009年）、「子供が暴れると豊作！？—仮装と子供の暴れ 奈良の祭の醍醐味」（奈良女子大学文学部なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド』昭和堂、2009年）など。

武田佐知子(たけだ・さちこ)

東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程修了。大阪大学大学院文学研究科教授。サントリー学芸賞思想歴史部門（1985年）、紫綬褒章（2003年）受賞。主要論著に『古代国家の形成と衣服制—袴と貫頭衣—』（吉川弘文館、1984年）、『衣服で読み直す日本史—男装と王権』（朝日新聞社、1998年）、『娘が語る母の昭和』（朝日新聞社、2000年）など。

加藤美恵子(かとう・みえこ)

滋賀県立大学大学院人間文化学研究科博士後期課程修了。日本女性史研究者。主要論著に『日本中世の母性と穢れ観』（塙書房、2012年）、「『女』の座から女房座へ」（脇田晴子編『母性を問う』上、人文書院、1985年）、「中世の女性と信仰」（女性史総合研究会編『日本女性生活史 中世』東京大学出版会、1990年）など。

濱千代早由美(はまちよ・さゆみ)

名古屋大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得後退学。皇學館大学・帝塚山大学非常勤講師。日本生活学会研究奨励賞（2000年）受賞。主要論著に「都市祭礼の生成と伝承—伊勢という都市社会を生きるための『つながり』—」（日本生活学会編『祝祭の100年』ドメス出版、2000年）、「民謡とメディア—新民謡運動を経た伊勢音頭をめぐって—」（『哲学』慶應義塾大学三田哲学会、128号、2012年）など。

れきし しゅうえん きょうせい じょせい けが えいせい
歴史における周縁と共生 女性・穢れ・衛生

2014(平成26)年 3 月25日発行

定価：本体6,800円(税別)

編 者 鈴木則子

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印 刷 亜細亜印刷株式会社
製 本

©N. Suzuki

ISBN978-4-7842-1714-4 C3021